

まず初めに、この度このような貴重な機会をいただくため、尽力していただいた関係者の皆さまには心より感謝いたしております。TPP への参加か否かが大きく取りざたされている今（われわれの出発の前に日米首脳会談終了後の安部総理の会見が行われましたが）、特に青森県の、また鶴田町の古くからの基幹産業である農業（特にリンゴ栽培）の盛んなニュージーランドに赴き、現在の状況を実際に目にし、机上の資料とも合わせ分析することは大変大事なことであり、必要不可欠なことであると思われまふ。十数年前に同じく鶴田町で行われたオセアニア地域の研修の時よりも、かなり様変わりしているはずでしょう。そのようなことで、この度は大変光栄でありました。

今回の研修は技術研修という面よりも、先にもありましたように TPP 問題の最中のため、流通・農業経営のシステムなどに焦点を置いた研修になりました（当然のことながら、技術の問題もコスト・品質などに結びつきますのでリンクしますが…）。そして、この文は主に“リンゴ”に焦点を置いて書きたいと思ひます。

1. リンゴの価値観の違い

まず、一番大きく感じたことは、文化的な意味でリンゴの価値観が大きく違うということです。日本にいる時でも何となく分かっていたようにも思ひますが、自分の目で農場やスーパーマーケットを見て、また現地の人間の慣習に触れると真の意味で実感できます。

日本人はリンゴに大きく付加価値を見出します（この表現が合っているか分かりませんが）。簡単に表現すれば、味・色・形・大きさ、特に味以外の部分にもこだわり、それを愛でる人が多い傾向があります。そのほかの食品にもその傾向はあるでしょう。韓国人にも似ている気質があると思ひます。彼らはリンゴも口にしますが、“ナシ”をさらに重宝し、そのように扱うようです。

ニュージーランド（おそらく欧米文化全般）では、日本人ほどリンゴを重宝しません。もっと気軽に口にします。リンゴ1個が、安価なせんべいを1枚口にする感覚に似ているような気がします。品質の半分のを半分の値段で、というような。

リンゴは世界中で認知されている果物だと思ひますが、これだけとらえられ方が違うのだということ改めて実感しました。日本側の価値観の方がマイノリティーなのかもしれません。この先どのように変化していくのかは分かりませんが。

2. 栽培・流通

栽培もそれに付随します。どちらが先なのかは分かりませんが。大きな資本を投入して、最大限の機械化によるローコストで大量生産します。ニュージーランド人の仕事に対する気質もあるかもしれませんが、青森リンゴのように人の手を使った摘果・着色手入れはしませんし、する必要もありません。そのかわり、日本に比べて保存性の高い果実を生産しようとしてます。視察先だったトマト農場とパプリカ農場はすべてが24時間コンピューター管理され、まさに“工場”でした。出資先やシステムは海外でした。非情なまでに効率的です。

大企業の経営には、日本にはあまりないですが品種改良も含まれますので、品種

改良のスピードアップが進めば、さらに加速度的に生産力が上がると思われまので、ここが危惧されるところです。

3. まとめ

今後、日本のリンゴ農家が輸入物にどれだけ影響されるかは、まだまだ解決されていない問題も多数ありますし、今すぐに壊滅的な影響を与えるものではないと思います（関税で守られていることに越したことはありませんが）。

われわれのできることは（どちらも前述に習う形での）、新しいマーケットを開拓すること・ある程度の効率化なのではないかと思いました。資本主義社会の行く末としての二極化は必ず起こる問題です。